

出会った人々 I

2019年3月12日(火) 天気、快晴 朝方はそうでもなかったが、昼頃から寒気が南下。これから暫く寒い日が続いた。

授業では、何日かぶりに Gavin 君が出席。日本人同様後ろの席が好きなのか、最後列に来て、私と話す。Gavin は自らのことをブリティッシュと紹介していたが、英国領北アイルランド、ベルファストの出身だった。ベルファストは 20 世紀の英国にとって、常に問題の焦点になるようなテロの舞台となった所。民族間の抗争や宗教対立が続いた場所だった。漸く 90 年代だかブレア政権の下で和解へと向かい、マスメディアの記事などに登場しなくなった。

Gavin は幼い頃、暴力と抗争が絶えなかったベルファストで育った。親戚にはプロテスタントもいればカトリック教徒もいたとか。その原理的な対立から自らは宗教から遠ざかって暮らしてきたと言う。北アイルランドには戻りたい気持ちはないと言う。彼はアジアを目ざした。最初は日本に来て暫く暮らした。そしてここ中国へやって来たと言う。この地に中国人の恋人が出来て、今は一緒に暮らしていると言う。安楽に暮らしてきた我々日本人には、容易に想像できない人生だったのかもしれない。そんな話を聞いて思わず「ハイマート・ロス」という言葉を投げかけてみた。「ドイツ語で『故郷を失った者』という意味だよ」と説明を付けて。

アイルランドで思い出すのは、その国を訪ねる前に読んだ「愛蘭土紀行」という司馬遼さんの本。例の如く、かの地のことを深く詳しく語る内容だった。そこで強調されたのがケルト人氣質というか、この地でアングロサクソンに侵略されて来た先住の人々の価値観など。要は、ケルト人は孤高で群れることがない。組織力をもつ英国人とは、大分違う民族だと言うこと。故郷を離れて、ハイマート・ロスの Gavin は、その典型なのかもしれない。

彼が比較的自由に生きて行くことができるのは、その英語が他国の人にとって大事な共通語になったから。この地でも、遼寧師範大学付属のハイスクールで、英語教師として働いていると、後から聞いた。

この日、私が暮らしている寄宿舎では、月に二度あるベッド用品の交換日だった。この頃までに知り合いになっていた、寄宿舎担当の従業員三人とが、私がベッドメイキングができるのかと心配していた。どうも中国では、古き良き権威主義が健在で、私が前は高校の教師だったというだけで、やけに丁重に扱ってくれた。一方でそういう人間は、シーツも取り替えられない坊ちゃんにも見ていたようだ。居室担当のシュアン(漢字は草カンムリに双)さんはわざわざ自

室までそれを見に来て、布団カバーがしっかりセットされているのを見て、満足そうに宿舎のフロントに戻って行った。



宿舎のサービス員だった、左から蔣さん、劉さん、そしてシュアンさん

シュアンさんは正直な人で、ある時、各階にあるキッチンの冷蔵庫で腐敗した食品を見つけて困っていた時、通りがかった私に「あなたでしょ！」と嫌疑をかけて来た。覚えのない私は、思わず「没有(めいよー)！」と否定した。こんなことがあっても苦手意識をもつこともなく後に引かず、さっぱりした性格だった。蔣さんは昼間の受付担当。私が入寮する際は、わざわざ私の重いスーツケースを持って外階段を上り、寮の玄関を通って部屋まで上げてくれた。外出する時など、スマートフォンから流れる音楽を止めて、天気の話などに付き合ってもらった。やれ今日は寒い(冷)だの、暑い(熱)だのと。そして、夕方からやって来て翌朝まで夜勤を担当する劉金柱さん。彼とは年齢が近く、どうやらこの仕事も退職後の第二の職だったようで、自分の家は近くだとも話していた。5月の労働節(メーデーのこと)の連休に河南省の旅へと出かけた時、何と朝の5時過ぎに部屋の扉を叩く音がする。まだ寝ていて良い時間だったが、何の用？と扉を開けると劉さんが立っていて、航空機に間に合うのかと心配した顔をしていた。こういう優しさは本当に有難かった。